

岐路に立つもんじゅ

事故半年の検証

関係者に聞く

1

高速増殖炉「もんじゅ」(敦賀市白木)のナトリウム漏出事故は、来月八日で発生から半年が経過する。設計ミスと見られる事故原因のお粗末さと、動力炉・核燃料開発事業団(動燃)によるビデオ隠し……。地元からわき起った猛反発に、国は原子力政策において「国民合意の形成」という難題にも取り組まざるを得なくなった。かつてない程の「危機」に、関係者はどう思うで臨んでいるのか。連続インタビューをした。

「地方が原子力を見ているのか」という疑問がある時代」と主張されている。背景にある。地域社会のためには原子力をどう活用すべきか、という視点が欠かせるも商業炉では達成されたに
もかわらず、社会はむしろ原子力を認めなくなつた。立地が決まらなくなつたのがその象徴だ。
豊かになり、国民に社会参加の欲望が出て来た。なぞ地方にだけ原発が「原

み始めている。「国民合意の形成を」と求めた三原知事の共同提言も、そんな時代の流れが根底にある。
「専門家に任せられない」という不信感を増幅した点でも、今回の事故は決定的だった。
この転換期に当たって、

非常に大きなインパクトを社会に与えてしまった。ビデオ隠しなどを契機に「問題をどうやって信頼回復すればいいか」と、思い悩む事件になった。
純粋に技術的な側面から見れば、克服できない事故

は日本では起きていない。しかし、今回は「技術的な問題はどうでした」と話すムードすら社会から消え去ってしまった。
新型転換炉の実用化放棄などで、原子力長期計画への国民の信頼感は失墜している。
長計を読んだことのある国民は残念ながらも少ない。事故でも起きた時々の四回目は招へい者に色々話してもらおう。その中から個別の論点が出てくるだろう、それについて議論を掘り下げていきたい。

——円卓会議を開いた感想は。抽象的、総論的な議論に終始していないか。
確かに、運営方法や開催意義にまでさかのぼって、素朴で根本的な意見が出されている。今までの専門家感覚なら「こんな会議は無駄だ」と言われるだろう。しかし、それが無駄だとは言えない時代になっている。
——何を基準に「国民的合意が得られた」と判断するのか。
「現政策への理解が得られるかどうか」ということになる。個人的には、プル議を設置したのも、今までのように「奥の院」にじっ話をおかず、「表に出て話さない」という時代の認識が強いからだ。
立地問題でわかるように、国民の理解なくしてはもう進まない。聞かへきことを聞き、言ひなきことを言ひこへ。

藤家洋一・原子力委員会委員



1935年生まれ。東京大大学院電気工学専門課程博士課程修了。名古屋大プラズマ研究所教授、東京工大原子炉工学研究所所長などを経て、95年から原子力委員会委員。アトムボリス構想の策定などで本県との縁は深い。

国民理解不可欠な時代

無駄でない円卓会議

とも言うものでは。過去の長計はそういうところがあつた。が、現長計では「国民あつての原子力」と打ち出している。円卓会議を設置したのも、今までのように「奥の院」にじっ話をおかず、「表に出て話さない」という時代の認識が強いからだ。
立地問題でわかるように、国民の理解なくしてはもう進まない。聞かへきことを聞き、言ひなきことを言ひこへ。